

# 失われたものたちの「居場所」: Edmund de Waalの“Library of Exile” 考察

窪田 希

## はじめに

Edmund de Waal (1964-) は、「ものを書くアーティスト」である (De Waal “Profile”)。イギリスを代表する現代陶芸家であり、陶磁器によるインスタレーションを中心とする作品を次々に発表している一方、根付のコレクションを通して自身の先祖であるユダヤ大富豪Ephrussi家の歴史を繙いた*The Hare with Amber Eyes: A Hidden Inheritance* (2010、以下略記HAE) がコスタ賞をはじめ複数の賞を受賞するなど、多方面に渡る功績が認められている。彼の言語／非言語による表現は、いずれも記憶をテーマにしており、喪失や流亡の経験に、芸術によって新たな命を与えることを試みている。

De Waalの2019年のインスタレーション作品“Library of Exile” (以下略記LE) は、様々な理由から祖国を追われた経験を持つ作家たちの書物を所蔵する「図書館」である。白いスリップで覆われた壁の内部には、90を超える国や地域から集められた2,000冊を超える書物が置かれている。その多くが翻訳作品を含み、人間の移動によって生じる言語のせめぎあいと、そこから生まれる創造的な可能性を示唆している。ヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展のために制作された作品“Psalm”の一部として誕生したLEは、ヴェネツィアでの展示を終えた後、ドレスデン、ロンドン、そしてイラクへと移動した。「人間にとって移動すること、異なる言語を話すということは何を意味するのかを問いかけ、それをめぐる沈思と対話を促す場所」(De Waal “Making”)として作られた「図書館」は、それ自体が「流亡の旅」に出て、各地の歴史と響きあいながら発展していった。

LEに収められた書物の大半は、De Waal自身の本棚から持ち寄られたものであったという。文学作品からインスピレーションを得ていると語るDe Waalは、様々な作家や思想家への応答として多くの作品を生み出している。その中には、事物の蒐集と記録を通して失われた過去の構築を試みた思想家、Walter Benjamin (1892-1940) や、アウシュヴィッツ後の沈黙の中から言葉を紡いだ旧ルーマニア領チェルノヴィツ生まれの詩人、Paul Celan (1920-1970) がいる。本稿では、De Waalに影響を与えたこれらの作家、思想家の言葉を手掛かりとして、LEという作品が持つ意義について考察したい。

## 1. 事物の蒐集と記憶: Walter Benjaminの思想

LEは、De Waalによる事物の蒐集、すなわちコレクションが収められた場所である。棚に並ぶ多言語の書物は、どれも「流亡」を共通項に集められ、蔵書というコレクションの構成要素となっている。事物を集めるという行為に、De Waalは幼少期から引き付けられていたようである。著書HAEにおいて、大叔父のIggyから受け継いだ264個の根付のコレクションを前にしたDe Waalは、自身の子ども時代のコレクションを思い起こしている。

I collected bones, a mouse skin, shells, a tiger’s claw, the sloughed scales of a snake, clay pipes and oyster shells, and Victorian pennies from the archaeological dig that my elder brother John and I started one summer in Lincoln, forty years ago . . . When I was seven the cathedral library was getting rid of mahogany cases, and so half my room was taken over by a vitrine – my first – in which I would arrange

and rearrange my objects, turn the key and open up the case on request. (*HAE* 350-351)

幼いDe Waalが集めていたものは、動物の骨や皮、貝殻、庭で発掘した古い硬貨や中世の建造物の欠片など、いずれも断片的な過去の遺物である。現在の中に偶然現れたそれらの事物を、大きなマホガニー製の飾り棚に思うように並べたり、手に取ってみたりするという遊びは、事物と空間の関係性、そして存在から想起される不在のありように対する彼の問題意識の始まりであったと言えよう。

事物を集めるということに対するDe Waalの関心について考えると、彼がWalter Benjaminの作品を愛読し、高く評価しているということも理解に難くない。2016年、ベルリンで開かれた個展“*Irrkunst*”は、この地で生まれ育ったBenjaminへのオマージュとして制作された。De Waalが展覧会のカatalogに寄せたエッセーによると、Benjaminは「事物を通して世界を捉える」ことを試みた数少ない思想家の一人であった (*Irrkunst* 5)。子どものおもちゃや本、絵葉書や切手等の蒐集家であったBenjaminは、蒐集するということの意義について以下のように論じている。

What is decisive in collecting is that the object is detached from all its original functions in order to enter into the closest conceivable relation to things of the same kind. This relation is the diametric opposite of any utility, and falls into the peculiar category of completeness. What is this “completeness”? It is a grand attempt to overcome the wholly irrational character of the object’s mere presence at hand through its integration into a new, expressly devised historical system: the collection. [H1a, 2]

(*The Arcades Project* 204-205、以下略記AP)

蒐集家は、事物を元来の機能性から切り離し、他の事物との関係性の中で捉えなおす。それは、個々の事物を新たな、異なる文脈に入れなおすということであり、全く恣意的な行為である。蒐集されることによって、事物は単なる客観的存在という在り方を変容し、新しい意味を獲得する。エッセー“*Unpacking My Library*” (1931) においてBenjaminは、「古い世界を新生させること」が蒐集家の持つ最も深い願望であると論じている (61) が、このことは「救済」とも言い換えられるだろう。

未完に終わったAPにおいてBenjaminが試みているのは、以上のような意味での「救済」に他ならない。狭くほの暗いパリのパサージュを歩きながら、彼は忘れ去られ、打ち捨てられた事物に目を向け、それらを記録していく。事物の名前を書き記すことは、蒐集の一つの方法である。パサージュで見つかる雑多な事物——古本や、骨董屋の隅に置かれた人形、時代遅れのポケットナイフなど——を書き留めることを通して、Benjaminは歴史のイメージを浮かび上がらせようとする。

断片から総体を捉えるという考え方は、エッセー“*The Task of the Translator*” (1921) において彼が使用する破片と器の比喩にも繋がる。ここで重要なことは、互いに補完し合う「破片」が作り上げようとする全体像は、もはや取り戻せないものであるという点にある。事物という存在への注視が、逆説的に不在を想起させるのだ。Benjaminの亡命生活が始まった1932年頃より執筆された*Berlin Childhood around 1900* (1938、以下略記BC) は、事物を通して失われた故郷の不在を受けとめようとするプロセスとして読むことができる。その冒頭は以下のように始まる。

In 1932, when I was abroad, it began to be clear to me that I would soon have to bid a long, perhaps lasting farewell to the city of my birth. (*BC* 37)

ユダヤ人作家として祖国を追われ、スペインのイビサ島、デンマークのスヴェンボル、フランスの

パリを転々とする亡命者となったBenjaminは、故郷ベルリンを再び見る日はもう訪れないということを知る。喪失に直面した彼は、故郷と最も深く結びついたイメージ、すなわち子ども時代を思い浮かべる。

I deliberately called to mind those images which, in exile, are most apt to wake homesickness: images of childhood. My assumption was that the feeling of longing would no more gain mastery over my spirit than a vaccine does over a healthy body. I sought to limit its effect through insight into the irretrievability – not the contingent biographical but the necessary social irretrievability – of the past. (同上)

Benjaminは、子ども時代の断片的なイメージを蒐集することで、故郷の記憶を形作ろうとする。その際、郷愁という感傷に支配されないために、偶発的な、個人の伝記的な意味での過去の回復不可能性ではなく、必然的、社会的な回復不可能性に目を向ける。徹底して過去との距離をはかり、経験をより大きな社会的事象に結びつけようとすることは、一個人の子ども時代に新しい意味付けを行うことを可能にする。記憶とは、想起する者の「今」における過去の意味付けである。

つまり、記憶は過去への遡行を通してではなく、現在の中で創り出されるものである。手に取れるような小さな事物であれ、遺跡や歴史的建造物であれ、過去の遺物に向き合う蒐集家は、過去に潜っていくのではなく、現在を立脚点として過去を掬い上げる。

The true method of making things present is to represent them in our space (not to represent ourselves in their space) . . . The same method applies, in essence, to the consideration of great things from the past – the cathedral of Chartres, the temple of Paestum – when, that is, a favorable prospect presents itself: the method of receiving the things into our space. We don't displace our being into theirs; they step into our life. [H2,3]

(AP 206)

過去の事物を現在の空間の中で受け止め、その意味を問う。それは記憶の営みであり、想起する者の現実認識を変容させうる。BCを書くということはBenjaminにとって、故郷が失われたということの意味を考え、その経験を理解していくために必要なことだったのであろう。電話や靴下、裁縫箱、回転木馬など、幸せな子ども時代と結びついた事物を一つひとつイメージとして顕在化させ、記録として蒐集することで、彼は故郷の記憶を創出しようとした——まさにその故郷を手放すという目的のために。

Benjaminは、死の直前まで蒐集家であり続けた。すべての持ち物を捨ててパリを逃れ、スペインへ徒歩で入国を試みるも失敗し、ピレネー山中の小さな町で服毒自殺を遂げた時、彼はたくさんの草稿やメモ書きを鞆に携えていたそうである<sup>1</sup>。先述のカタログのエッセーにおいてDe Waalは、Benjaminがこれらの断片的な記録をいかに大切に扱っていたかについて触れている。

[H]e conducts himself with care around fragments of text, written on envelopes, scraps of paper, recording aphorisms and quotations, the sayings of his young child, the toys bought from men on the street. He puts ideas aside for later, fills notebooks and index cards, lists his books, his archive. (*Irrkunst* 6)

幼い息子の言葉や、格言、思索途上のアイデア、パリに残してきた蔵書のリストなどのとりとめのないものを、彼は蒐集し、保管し続けた。それは、死を目前にしてもなお更新され続ける、決して完成されることのないアーカイブであった。

Benjaminが蒐集することに執着するのは、そこに「ある」ものを通して逆説的に「ない」ものの不在を再確認しているからである。そのような意味で、Benjaminのコレクションは存在と不在の両方を内包しており、常に未完のアーカイブである。このことは、De WaalのLEにも当てはまる。図書館に収められているのは書物の集積であるが、書物という存在から、失われたもの——祖国や人、そして言葉——の不在が思い起こされる。失われたものが確かに存在したという痕跡を集めながら、その痕跡が却って不在を強調するという点において、LEはアーカイブ的な空間である。

遺された物や記録という断片を集め、繋ぎ合わせることはできても、何が起こったのか、何が失われたのかをはっきりと捉えることはできない。深い悲しみや痛みや感情、あるいは不可解さゆえに言葉にはならないものの不在を、そこに横たわる沈黙が語っている。事物の周囲には、物事に言葉が与えられ、存在してゆく以前の状態、すなわち沈黙が影のように寄り添っている。

事物の集積を収めるLEにおいて、沈黙はどのように表現され、機能しているのだろうか。この問いについて考えるため、次章では、沈黙と言葉の境界において表現した一人の作家の生に注目する。ホロコーストを生き延びたドイツ語詩人、Paul Celan (1920-1970) である。

## 2. 沈黙への帰還：Paul Celanの詩空間

Paul Celanは、1920年、ルーマニア（現ウクライナ）のチェルノヴィツで、ユダヤ人の両親のもとに生まれた。父親のLeoは熱心なシオニストで、Celanが幼いころからヘブライ語を習わせ、ユダヤ教の伝統に基づいた教育を行った。Celanが成長するにつれ、厳格な父親とは徐々に距離がひらいていったが、他方で母親のFritziはCelanにとって常に特別な存在でありつづけた。Fritziはドイツ文学に親しみ、家庭での会話にヘブライ語ではなくドイツ語を使用することを望んだ。CelanとFritziは、ドイツ語とドイツ文学を通じて深い絆で結ばれていた。Celanは15歳ごろから詩作を始めたが、知られている中で最も初期の作品と言われているものは、1938年の母の日に書かれたソネットである。

Celanがチェルノヴィツの大学でロマンス語文学の勉強を始めた頃、第二次世界大戦が勃発した。1941年のドイツの侵攻により一家はゲットーへと移され、Celanは郵便局の瓦礫の処理やロシア語の書物の破壊といった労働を強いられた。1942年6月、LeoとFritziがトランスニストリアの強制収容所へと連行され、その年の秋にLeoがチフスで死亡、また冬にはFritziが「うなじ撃ち」により殺された。この喪失体験による底知れぬ悲しみ、そして自分一人が生き残ってしまったという罪の意識は、生涯Celanにつきまとった。

ホロコーストは、人間の理解を超えた苦しみと痛みの経験として歴史に刻み込まれた。それはまさに言語を絶する体験であり、表現する言葉がないゆえの沈黙だけがその本質に近づき得た。また、Celanのようにドイツ語を母語とする詩人にとっては、ドイツ語を使用するということが大きなジレンマをはらんでいた。最愛の母が語りかけてくれた言語は、今やその母親を殺した敵の言語となったのである。言語化を拒むような体験を経て、それでもなおCelanは詩を書き続けた。それは、暗闇の中から新たに見出される言葉の必要性をCelanが信じていたからにはかならない。1958年のブレーメン文学賞の受賞スピーチで、Celanは以下のように語っている。

It, the language, remained, not lost, yes in spite of everything. But it had to pass through its own

answerlessness, pass through frightful muting, pass through the thousand darkness of deathbringing speech. It passed through and gave back no words for that which happened; yet it passed through this happening. Passed through and could come to light again, “enriched” by all this.<sup>2</sup>

全てが失われた中で、唯一手元に残った「言葉」。言葉にならないような苦痛の経験があったにもかかわらず、あるいはそれゆえに、ホロコースト後の言語表現は、多様な手段によって現実を描き出そうとする。そのような「豊かにされた」言葉によって、Celanは自らを取り巻く世界を理解し、人間がどこへ向かっているのかを探り、時空を超えた他者との対話に開かれたものを書こうと試みたのだ。

BenjaminがBCの執筆を通して故郷喪失に向き合ったように、Celanは詩作を通じて故郷のイメージを浮かび上がらせようとした。第三帝国によって祖国を追われたユダヤ人にとって、故郷を喪失するということは、自らの過去に対する権利を奪われるということの意味していた。祖国と呼べるものが存在しなくなったことで、そこに根差していた過去が崩れ去る。記憶を手繰り寄せて思い浮かべる故郷の風景やそこで話されていた言語、自分の名前さえもがもはや異質なものとなり、自らの存在の証がどこにも見つからないということに気づく。Celanの最も有名な詩の一つである“*Aspen Tree*” (*Espenbaum*) は、このような過去との断絶の感覚を痛切に表現している。

Aspen tree, your leaves gaze white into the dark.  
My mother's hair ne'er turned white.

Dandelion, so green is the Ukraine.  
My fair-haired mother did not come home.

Rain cloud, do you dally by the well?  
My quiet mother weeps for all.<sup>3</sup>

詩人は故郷の風景とそこに存在した事物を一つひとつ想起している。時間が無化されたような詩の空間の中で、永遠に帰らぬ人となった母の幻影が浮かびあがる。涙を流す母の姿は旧約聖書のRachelを彷彿とさせ、子どもとの別離を嘆き悲しむ普遍的な「母」のイメージをつくりだす。また、母親の「髪」はこの詩における一つの重要なモチーフとなっている。士師記のSamsonの物語が表すように、「髪」は生命の象徴であり、母の髪が「白くなることはなかった」ということは母親の命が絶たれたことを意味している。

Celanの詩において、白という色は沈黙と結びついて重要な意味を持っている。“*Homecoming*” (*Heimkehr*) では、そのことが特にはっきりと読み取れる。

Snowfall, denser and denser,  
dove-coloured as yesterday,  
snowfall, as if even now you were sleeping.

White, stacked into distance.  
Above it, endless,

the sleigh track of the lost.

冷たく無機質な雪が一面に降り積もる情景は、明らかに死を連想させる。しかし、そこに「鳩の色」という言葉が加わることで、かすかな温かさと穏やかさが仄めかされる。遠景へと繋がる真っ白な雪景色と、その上をどこまでも続いていく橇の軌跡は、時間というものの存在しない空間を描き出す。

Below, hidden,  
presses up  
what so hurts the eyes,  
hill upon hill,  
invisible.

On each,  
fetched home into its today,  
and I slipped away into dumbness:  
wooden, a post.

雪の下から頭をもたげるものは、墓石と解釈できる。重い雪が死者たちを覆い隠している様子は、沈黙の中から浮かび上がろうとしては消えていく、語られることのない言葉を表している。それを目にした詩人は、一本の木の杭のように言葉を持たぬものとなって、雪景色の一部となる。詩人自身が、沈黙へと退いていく。

There: a feeling,  
blown across by the ice wind  
attaching its dove- its snow-  
coloured cloth as a flag.<sup>4</sup>

死をもたらすような冷たい風に吹かれて、鳩色の旗が翻る。Celanの他の詩にも登場する「旗」のモチーフは、国家や土地への帰属、あるいは、失われた者を弔うために掲げられる半旗として、喪失と結びついている。Celanにとっての地上の故郷はナチス・ドイツの侵攻とともに永久に失われてしまった。さらに、ホロコーストという破壊を経てユダヤ・キリスト教的な神を信じ続けることはできず、したがって「神の国」という拠り所を求めることもできない。Celanにとっての「故郷」というテーマは、修復することのできない過去との断絶を内包している。

この詩においてCelanが表現する“homecoming”とは、元いた場所へと「戻る」という意味の「故郷」ではない。むしろ、鳩色の旗がたなびく雪景色が表しているのは、詩人が詩作を通じて辿った旅の行く末に、沈黙の領域へと行き着いたということである。創世記の“In the beginning was the Word”という一節が表すように、すべての存在を存在たらしめるのは言葉である。とすれば、言葉の無い状態、すなわち沈黙は、すべての存在の根源であると言える。この詩は、後に自死という形で沈黙を選ぶことになる詩人の運命を暗示しているが、自らが生まれ出た根源への回帰であったと考えれば、彼の死は決して絶望的なものではない。雪の重みを感じながら一步一步踏みしめた長い旅を経て、

流亡の詩人はすべてのものが還るべきところへとたどり着く。

De Waalは自身の作品におけるCelanの影響の大きさについて幾度となく語っているが、CelanとDe Waalを繋いでいるのは帰還のイメージである。2019年、ロンドンで行われた講演会で“Homecoming”を英語で朗読したDe Waalは、Celanの詩は「白への帰還」「沈黙と一体となることで、あるべき場所に辿り着くこと」についてうたっていると語った(“Making Silence” 17:40-19:22)。De Waalにとっても、白という色は沈黙と密接に結びついており、存在と非存在の境目の色だという(同)。英国シェフィールド大学には、Celanの“Homecoming”に直接のインスピレーションを受けた作品“Fetched Home”が寄贈されている。白い木の棚に淡い色の陶磁の壺が間隔を空けて並べられ、枠には曇りガラスがはめ込まれている。曇りガラスの向こうにはぼんやりと像を結ぶ陶磁は、記憶の中に浮かんでは消える故郷を思い起こさせる。長年に渡り、難民の職員や学生の受け入れを行ってきたシェフィールド大学にあって、この作品は故郷を失うということ、移動するという意味の問いかけると同時に、居場所を失った人々を迎え入れる標となることをDe Waalは意図している(“Fetched Home by Edmund de Waal” 00:20-00:30)。

常に「ここではないどこか」を探して旅する流亡の人々や事物の「居場所」を創出するということは、芸術家としてのDe Waalの重要なテーマであり、LEとして結実したといえよう。次章では、これまで見てきた事物と記憶の関係性、そして沈黙への回帰という視点から、De Waal自身によるLEの解説を読み解き、このインスタレーションがいかにして失われたものたちの「居場所」となりうるのかを考える。

### 3. 流亡の旅の行方：失われたものたちの「居場所」

This is the library of exile

Antioch is the first and then the library of the Serapium  
in Alexandria,  
and then the library of Al-Hakam, Córdoba  
and Rayy burned by Sultan Mahmud of Ghazni

This is the way that Mnemosyne lives  
This is the history of lost libraries . . .

(De Waal in *Edmund de Waal: Library of Exile* 60)

LEは、歴史の中で失われた図書館を記憶する。図書館の破壊は、人間が文字によって書き記した知識の蓄積の破壊であり、暴力や権力によって、古代から今日に至るまで残酷に繰り返されてきた。図書館を取り囲む白い壁の表面に書き記された「哀歌」(threnody)は、363年に皇帝ヨウリアヌスによって破壊されたアンティオキアの王立図書館に始まり、2015年にダーイシュによって破壊されたモスル大学の図書館まで、世界中の失われた図書館の名前を挙げ連ねる。名前の一つひとつが、かつてこの地上にあった図書館と、そこに収められていた書物の存在を証立てる。

リストの中には、De Waalの曾祖父、Viktorの図書室も含まれている。

I'm writing this for my Great Grandfather Viktor,  
who saw his library stolen in Vienna. (同)

1938年のナチス・ドイツによるオーストリア併合によって、Viktorはウィーンで築き上げた家族の生活を奪われた。財産はすべて没収され、一家が暮らした邸宅には政府の事務所が設置された。妻のEmmyと共に亡命した彼は、スロヴァキアを経てイギリスに辿り着いた。スーツケースたった一つを携えて未知の土地に降り立った時、彼はウィーンの図書室に残してきた本箱の鍵を身につけたままであったという (HAE 268)。破壊された図書館の名前が呼び起こす歴史の記憶と、De Waalの家族の個人的な記憶が重なり合う。

第一章で言及したように、記憶とは、失われたものを現在において受容し、その喪失の意味を考えるということである。De Waalはそれを、不在を存在へと変化させる行為であると説明する。

Remembering these losses is way of making their absence into presence. It is about the activity of memory. As I wrote into the porcelain I smudged some of the names of the libraries, rewrote on top of these and added areas of gold leaf so that there is a shimmer that retreats and appears. This coming and going is how grief works. (61)

イメージによって顕在化されることで、失われたものは東の間の「蘇り」を果たす。しかし、記憶によって取り戻された存在は、一瞬のうちに想起する者の手をすり抜けていく。図書館の壁に書き記された文字がところどころ滲んだり、金箔が反射する光が現れたり消えたりするように、存在と不在が入れ代わり立ち代わり浮かび上がる。喪失によってもたらされる感情もまた、このような往復を繰り返し、決して終わることがない。LEは、単に失われたものを顕在化させるだけでなく、その喪失に伴う感情を呼び起こす。いつまでも癒えることのない悲しみや、沈められることのない怒りの感情を。

図書館の内部には、古代ローマの詩人OvidからJudith Kerr (1923-2019) のような現代の作家に至るまで、祖国を追われたり、著作を読者に届けることが叶わなくなったりした作家たちによる多言語の書物が並ぶ。異なる言語や文化、思想がせめぎ合いながら共存するLEのありようは、異質性の排除による「浄化」を目的とする焚書や図書館の破壊の対極をなす。多様で複層的な現実をDe Waalに最初に意識させたのは、ゲットー発祥の地ヴェネツィアであった。2019年の春にこの地を訪れたDe Waalは、長年否定的な象徴として理解されてきたゲットーという場所が、実は豊かな多様性を内包した場所であったということに思いを馳せた。

Sitting in the Ghetto made me think of the great sweep of languages of this place, the mingling of high and low argot and slang, of the dialects of the Armenians, Germans, Flemish, Persian Ottoman, Spanish and Portuguese Jews alongside Italians. This was a place of constant translation, a testing ground for comprehension and nuance, noisy with learning, education, debate, poetry and music, liturgy and exegesis. (64)

隔離と抑圧という消極的な意味合いの向こうに、多言語が飛び交う創造力と活気に満ちた場所としてのゲットーの姿が浮かび上がる。ヨーロッパ各地での迫害を逃れ、ヴェネツィアに集まったユダヤ人は、詩や音楽、教育や聖書解釈、その他の様々な文化的議論でこの地を満たした。祖国を追われ



ることは痛みを伴う経験であるが、その一方で、人間の精神は移動することによって他者と出会い、創造へと向かっていく回復力を持っている。De WaalのLEも、喪失を記録すると同時に、移動によってもたらされた異なる要素の混在、そこから生まれる新たな可能性を称揚する。

こうしてヴェネツィアのゲッターから始まったLEは、文学や芸術についての議論と対話の場所であるアテネオ・ヴェネトでの展示を終えたのち、流亡の旅に出た。最初に「図書館」を招き入れたのは、ドイツのドレスデン、Friedrich August Iによって陶磁器のコレクションを保管するために創設された日本宮殿である。ドレスデンはナチスによる最初の焚書が行われた場所であり、1933年の空爆による傷跡を鮮明に残す街でもある。近年再び極右の台頭が懸念されるこの地においてLEの門を開くということは、緊急性と必要性を伴っていた。次に図書館が向かったのは、ロンドンの大英博物館である。世界中からこの場所に集められた博物館の所蔵品の数々は、それぞれ祖国からの流亡の途にあると言えるだろう。図書館が設置されたキングズ・ライブラリーは元々 George IIIが収集した書物を所蔵する図書館であったが、ロンドン大空襲による破壊を経て、現在はギャラリーになっている。ロゼッタ・ストーンやオストラコンなどが並ぶ間に持ち込まれたLEの空間は、人類の歴史を物語るそれらの事物との対話に参画しながら、また新しい色味を帯びた。

ヴェネツィアからドレスデン、そしてロンドンへと向かう間、図書館には人々から寄せられた数百の書物が加わり、蔵書は日々成長していった。そのすべてに蔵書表 (Ex Libris) が付され、来訪者は自分にとって大切だと感じる本の蔵書表に名前を記すことができた。蔵書表の上で自分の名前と他者の名前が並ぶのを見ることは非常に親密な経験である。書物が手から手へと渡ること、人々の想起が延々と続いていく。

想起の営みを繋いでいくことは、De WaalのLEが果たす最も重要な役割である。De Waalは、ホロコースト生還者でエッセイスト、作家のJean Améry (1912-1978) の言葉を引用しながら、このことを説明している。

I do not have [clarity] today, and I hope that I never will. Clarification would amount to disposal, settlement of the case, which can then be placed in the files of history. My book is meant to aid in preventing precisely this. For nothing is resolved, nothing is settled, no remembering has become a mere memory. (72)

人間の歴史の中で起こったあらゆる残虐行為、破壊行為は、解決のないものとして留まっている。それらを一つの意味のもとに理解してしまうことは、歴史として片づけ、終わったものにしてしまうことである。Améryの言葉や、De WaalのLEが目指しているのは、まさにこのような意味での固着化に対する抵抗である。過去の出来事を、現在を生きる私たちに繋がることとして受け止め、想起するたびにその意義を考えていくことが求められている。喪失も流亡も苦難の経験も、すべてが絶え間なく変容しながら続いていくということ、この図書館は感じさせる。

流亡の図書館や書物、人々が最終的に行き着くのは、あらゆる存在の根源としての沈黙の領域である。Celanが詩作によって表現した沈黙を、De Waalは陶磁器によって生み出そうとしている。LEの本棚の間に置かれた4つのガラスケースは、たくさんの「声」の狭間に沈黙の空間を創り出す。Daniel Bomberg (1483-1549)<sup>5</sup>によってヴェネツィアで印刷されたタルムードを模して作られたケースの中には、白い器が間隔を空けて並び、薄く切り出された大理石の板が置かれている。常に流動し変化していく現実の中で、器は静止した空間を出現させる。その沈黙、無の空間は、そこから言葉や、歌や、存在が生まれるところであり、それらがやがて還るところでもある。

沈黙の領域へと向かう事物や人々の存在が、LEの空間に掬い上げられる。流亡の事物や人々に、元いた場所へと戻るといった意味での帰郷は訪れない。しかし、明日を生きる場所を求めて移動し続ける中に、「居場所」を見つけることはできる。LEは、時間の流れの中で消えゆくものの存在の証を記すことで、それらの「居場所」となったのだ。追いやられ、忘れられ、捨て去られたものが、人々の想起を通してこの場所に立ち現れる。

## おわりに

2020年の大英博物館での展示ののち、図書館に所蔵されていた書物はロンドンからさらに移動し、再建途中のイラクのモスル大学の図書館に辿り着いた。この図書館は、2015年のISISの攻撃によって破壊される前までは、中東圏最大の図書館の一つだった。多くの貴重な書物が失われたこの場所は、今や流亡を続けてきた書物の一つの居場所となっている。インスタレーションが解体された後も、LEの旅は続いているのだ。

LEは、歴史の中で失われたものの存在を記録し、記憶することによってそれらに「居場所」を与えた。地上の帰郷は果たせないあらゆるものを受容するという意味において、LEは越境的な空間である。来訪者は、失われた図書館を、書物を、祖国を、言葉を、そして人々を想起する。想起がもたらす悼みの感情によって、失われたものへの追悼がなされる。こうした記憶の営みが続いていくことは、忘却への抵抗となる。アウシュヴィッツもヒロシマも、すべては終わっておらず、現在を生きる私たちに続いているのだ。このことを感じ、未来へと開かれた対話を紡いでいくことが、LEの空間では可能になる。

LEの意義を考えるにあたって、De Waalの著作や、他のインスタレーション作品との関連、ソーシャルメディアを通して発信される言葉など、検討すべき課題は残っている。喪失と流亡、そして帰還というテーマをDe Waalがどのように展開しているのかを探るために、今後より多角的な視点からDe Waalの作品を評価することが必要である。

## 注

- <sup>1</sup> Benjaminのピレネー越えを助けたユダヤ人女性Lisa Fittko (1909-2005) による回想録、*Escape through the Pyrenees* (1991) には、鞆の中身についての彼女とBenjaminの会話が記述されている。
- <sup>2</sup> John Felstiner. *Paul Celan: Poet, Survivor, Jew*. New Haven, CT.: Yale UP, 1995. 114-115より転載。
- <sup>3</sup> 英訳は*Poems of Paul Celan*, translated by Michael Hamburger, New York: Persea Books, 1988, 39による。
- <sup>4</sup> 英訳は同上109による。
- <sup>5</sup> 16世紀の印刷業者。キリスト教徒であるが、ヴェネツィアにヘブライ語の聖書の印刷に特化した印刷所を設立し、ユダヤ学者やラビと共に書物の制作を行った。

## 引用・参考文献

### 出版物：

Améry, Jean. *At the Mind's Limits: Contemplations by a Survivor of Auschwitz and Its Realities*, translated by Sidney Rosenfeld and Stella P. Rosenfeld, Bloomington, IN.: Indiana University Press, 1980.

Benjamin, Walter. *Berlin Childhood around 1900*, translated by Howard Eiland, Cambridge, Massachusetts, London: Belknap Press of Harvard UP, 2006.

———. *The Arcades Project*, translated by Howard Eiland and Kevin McLaughlin, Cambridge, Massachusetts,

London: Belknap Press of Harvard UP, 1999.

———. “Unpacking My Library: A Talk about Book Collecting.” *Illuminations: Essays and Reflections*, translated by Harry Zoen, edited and with introduction by Hannah Arendt, New York: Schocken Books, 1969.

Celan, Paul. *Poems of Paul Celan*, translated by Michael Hamburger, New York: Persea Books, 1988.

De Waal, Edmund. *Edmund de Waal: Irrkunst*. Berlin: Holzwarth Publications, 2017.

———. *Edmund de Waal: Library of Exile*. London: The British Museum, 2020.

———. *The Hare with Amber Eyes: A Hidden Inheritance*. London: Chatto & Windus, 2010.

Felstiner, John. *Paul Celan: Poet, Survivor, Jew*. New Haven, CT.: Yale UP, 1995.

Fittko, Lisa. *Escape through the Pyrenees*, translated by David Koblick, Lexington, MA.: Plunkett Lake Press, 2020.

Rigs, Thomas, editor. *Reference Guide to Holocaust Literature*. Chicago, IL.: St. James Press, 2002.

#### Web :

De Waal, Edmund. “Fetched Home by Edmund de Waal.” *YouTube*, uploaded by The University of Sheffield, 2 June 2016, [www.youtube.com/watch?v=3bQFq-n7Dqk&t=30s](http://www.youtube.com/watch?v=3bQFq-n7Dqk&t=30s). Accessed 17 Jan. 2023.

———. “Making.” *Edmund de Waal*, 9 Feb. 2023.

[www.edmunddewaal.com/making/library-of-exile-1#1](http://www.edmunddewaal.com/making/library-of-exile-1#1). Accessed 22 Feb. 2023.

———. “Making Silence.” *YouTube*, uploaded by Hibrow, 16 Mar. 2019.

[www.youtube.com/watch?v=4-VwUyK-hCQ](http://www.youtube.com/watch?v=4-VwUyK-hCQ). Accessed 17 Jan. 2023.

———. “Profile.” *Edmund de Waal*, 9 Feb. 2023.

[www.edmunddewaal.com/resources/profile](http://www.edmunddewaal.com/resources/profile). Accessed 22 Feb. 2023.